

天声人語

1998年10月20日(火) 朝日新聞 朝刊より

慶良間諸島は、沖縄本島の西30-40キロの海上に連なっている。先日、20を超える島の一つ、阿嘉島の海に潜った。

▼周囲11.5キロ、住民327人のこの島の海は、サンゴが豊かだ。夏はダイバーでにぎわう。当日は気温30度、水温29度。曇り空だが、ボートの上から見る水は透き通っていた。地味な褐のサンゴが、水深数メートル前後の海底一面を覆っている。これがふつうの色である。

▼だが、褐色の中のかなりの面積が、妙に白っぽい。空気のタンクを背負って、潜行してみる。真っ白、薄い黄色、紫色、ピンク。さながらお花畑だった。美しい。が、本来の色でないせいか、一方でどこか落ち着かない。沖縄や奄美に広がっているサンゴの「白化現象」だ。

▼財団組織の阿嘉島臨海研究所は、サンゴとサンゴ礁の観察、研究を、10年前に設立してからずっと続けている。そこの大森信・東京水産大教授によると、サンゴの生育に適した水温は25-29度。しかし、今年は初夏から水温が高く、とくに8月はずっと30度を超えていた。その季節、台風が少なく、海水がかき回されなかったことも、水温上昇に拍車をかけたらしい。

▼サンゴの体内には、直径10マイクロメートルくらいの褐虫藻が共生している。褐虫藻なしでは、サンゴは長くは生きられないところが水温が上がったため、褐虫藻が体外に抜け出てしまった。これが白化だ。異常が続けばサンゴは死ぬ。

▼実は全地球の熱帯域で、去年来、同じ現象が報告されている。地球の温暖化と関係しているのだろうか。でなくても陸地の乱開発や沿岸の破壊で、世界のサンゴ礁は危機にさらされている。10年以内に3分の1が失われる、との予測もある。

▼「これは死の直前の美しさといえるかもしれない。人間の営みに対する警鐘ですね。」海から上がって、大森さんがいった。